女性化乳房の診断と治療

本症の発生には内分泌異常との関連性も示唆されており、血中エストロゲンの増加またはアンドロゲンの減少をきたす疾患で発症しやすいです。また、発生の原因として基礎疾患に起因するもの（アンドロゲン欠乏をきたす性腺機能低下症、エストロゲン産生過剰をきたす精巣腫瘍、副腎腫瘍、肝障害、腎不全、心疾患、甲状腺機能亢進症など）、薬剤に起因するもの（ホルモン剤、ジギタリス、降圧剤、向精神薬、抗潰瘍薬など）、原因が不明のものがあります。症状として男性の乳輪下に硬結ないし腫瘤を触知します。時には疼痛を伴い、一側性または両側性におこることもあります。

診断：

臨床症状と視触診で多くは診断可能です。しかし、本症を起因する基礎疾患や薬剤性などの原因の検索が必要です。マンモグラフィでは腫瘤様陰影を認めることが多いです。超音波では比較的限局した豹紋状陰影の乳腺像ないしは限局した腫瘤様として認められることが多いです。本症は乳がんとの鑑別が重要であり、乳がんでは腫瘤が偏心性にあり、境界鮮明で硬く、表面不正で時に乳頭陥凹や血性乳頭分泌をみることもあります。悪性の疑いがあれば細胞診や組織診を行います。

治療：

基礎疾患がある場合は原疾患の治療を優先します。薬剤性の場合は関連する薬剤を中止または減量します。